視覚イメージ伝達を伴う相互行為のカテゴリー分析

――カメラ付き携帯電話による写真送付と会話に関する一考察――

水　川　喜　文

目　次

０．はじめに
１．研究背景と先行研究
２．研究方法とデータ
３．前提的考察
４．分　　析
５．結　　論

０．はじめに

本研究では，視覚イメージ伝達を伴う携帯電話の相互行為がいかになされるか，エスノメソドロジーと会話分析の視点からの考察の一端を示したい。特にこの研究では，カメラ付き携帯電話による写真送付を行った後の携帯電話での音声会話において，視覚イメージがいかにしてカテゴリーを用いて伝達されていくか分析する。これにより，写真付きメール送付に伴う携帯電話の会話において，視覚イメージの伝達というものが，単に映像詳細の伝達というイメージの正確さが問題になるだけではなく，参与者のカテゴリーの非対称的な使用と視覚イメージのカテゴリー化による秩序化によることを示していく。また，携帯電話という様々な制約のある情報伝達装置において，その制約をリソースとして用いることが，いかにして当該の会話のシークエンスやカテゴリーとかかわりを持っているか考察していきたい。

１．研究背景と先行研究

1.1. 研究背景：カメラ付き携帯電話の使用状況

日本においてカメラ付き携帯電話は，1999年７月に初めてPHSで市販され，2000年11月に発売したＪ－フォン（その後のボーダフォン，ソフトバンク）がその翌年「写メール」というサービス名にしたことで普及した（松田ほか編 2006：40-41など）。この開発背景には，若者たちの間の「プリント倶楽部（プリクラ）」による自己や親しい人の写真シールの収集や，レンズ付きフィルム（いわゆる，使い捨てカメラ）による日常風景の撮影が普及したことがあったとされる。現在では，静止画撮影機能は，携帯電話の一般的な機能として付属している。『ケータイ白書 2007』（モバイル・コンテンツ・フォーラム編，図１から図３の出典も同書）によれば，2006年10月のカメラ付き携帯電話の保有状況は，95.2%となっている（図１）。このように，携帯電話にはカメラが付いているのが基本機能となっているため，企業の機密保持のためにわざわざカメラ機能を外したものまで販売されている。

カメラ付き携帯電話のカメラ機能の保有者における利用状況は，97.8%と持っている人のほとんどが利用している。カメラ撮影頻度は週１回程度以上と月１回以下がほぼ同数となっている（図２）。撮影したした画像は，携帯電話に保存する場合が81.7%と最も多く，

キーワード：視覚イメージ，携帯電話，相互行為，会話分析，カテゴリー

プリントアウトは7.2%である。静止画メールの送信頻度は，月数通程度以下が79.4%となっている（図３）。NTTドコモ・モバイル研究所が企画・監修する『モバイル社会白書2007』でも，カメラ付き携帯電話で撮影した静止画を送付する機会は，１週間に１回未満が約７割以上となっている[1]。

このように，カメラ付き携帯電話の所有は普及しており，カメラとして写真を本体に保存することはあるが，送信頻度はそれほど多くない。これにはパケット通信による経済的負担ということに加えて，携帯電話特有のイメージ伝達のあり方についても考察すべきところがあるように考えられる[2]。

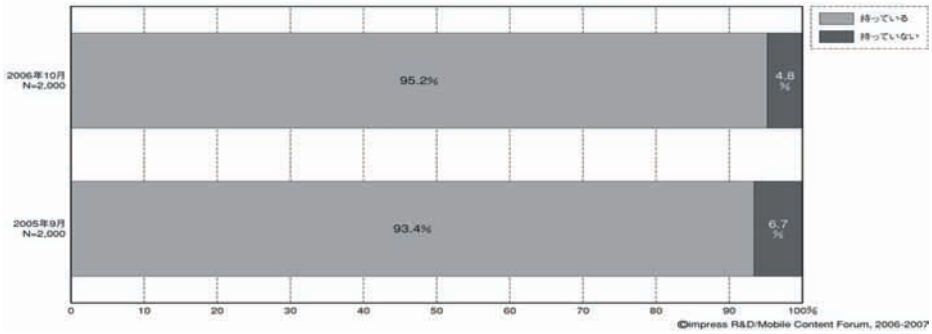


図１：カメラ付き携帯電話の保有状況［2005年-2006年］

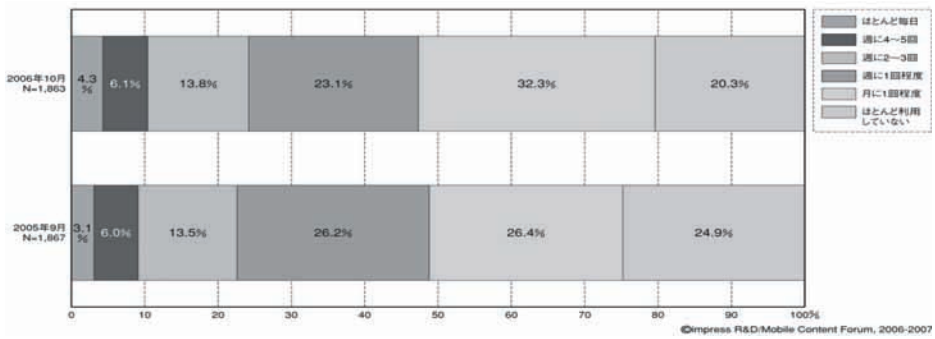


図２：カメラ付携帯電話の撮影頻度［2005年-2006年］

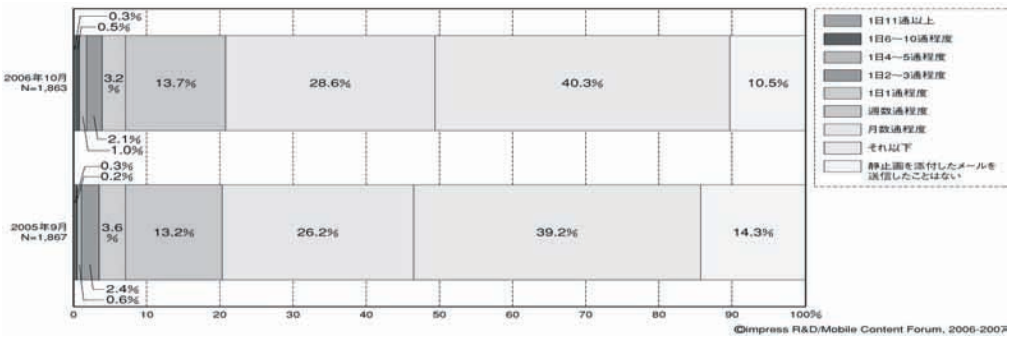


図３：携帯電話での静止画メールの送信頻度［2005年-2006年］

1.2. カメラ付き携帯電話に関する先行研究

携帯電話に関する研究は，近年日本においても蓄積されてきている（岡田・松田編 2002, 松田ほか編 2006など）。さらには，エスノメソドロジー・会話分析からの携帯電話研究も成果を出され始めている（山崎編 2006）。これらの中で，カメラ付き携帯を焦点化したものもいくつか出てきている。

その中でも，岡部・伊藤（2006）では，カメラ付き携帯電話の利用に関して，エスノグラフィー的調査を行っている。この論文においては，これまでのカメラ付き携帯電話の研究を概観した上で，通信利用料が無料など通話者に「インセンティブのある」調査ではなく，「自然な」利用パターンを調査対象にするとしている。その上で，「コミュニケーションダイアリー」（Grinter and Eldrige）のデータとインタビューから分析を行っている。ここでは，高校生から社会人まで異なった背景のある15人に，写真を撮ったり受け取ったりした際のコンテクストを記録して，事後インタビューをしている。

その結果，（1）「パーソナル・アーカイビング」（2）「親しい人どうしのヴィジュアル・シェアリング」（3）「仲間どうしのニュース・シェアリング」という特徴的なプラクティスが見受けられた，としている（岡部・伊藤：238-246）。このうち，（1）は，「視覚的メモ」として日常的な光景の写真をなにげなく撮影したもので，アイデンティティ構築のリソースとしての私的アーカイビング，としている。これは，携帯電話の移動体通信としての意味より，カメラを持ち運べるという「携帯できるカメラ」という意味が強いように思える。（3）は，友人たちが興味を持ちそうな「注目に値する」写真を端末に保存しているものであり，「友達どうしで，おもにスクリーンごしに見せ合うことで共有」されるものとされた。これも移動体通信としてのカメラ付き携帯電話というより，「携帯できるカメラ」としての機能を使ったものである。これら二つの分類と分析結果は，カメラ付き携帯で撮った写真は，「送信可能」ではあるが「送信はあまり盛んではない」という調査の結果とも合致する（『ケータイ白書 2007』: 67）。

これらに対して（2）は，送信相手との社会関係に（「親しい間柄」かどうか）よって送信される可能性のあるものである。これは，携帯電話の移動体通信としての特徴と携帯できるカメラという特徴を結びつけた社会活動といえよう。ここには，「ケータイというテクノロジーによる写真の共有／非共有を介した『社会関係の組織化』というプラクティスがみてとれる」。それにより「場の共有感」が達成され，「フルタイム・インティメイト・コミュニティ」といえる関係も見られたとしている。そして，「送信する相手の幅は狭くなり，送信される内容もより選択的になる。このような視覚情報の偏在的な共有は，ケータイメール空間と異なり，互いの『視点』に基づいて『場の共有感』を達成する，新たなモダリティの構築につながる」としている。

本研究では，このような携帯電話に保存された静止画の分類や名付けは，さしあたり行わない[3]。さらには，データを研究協力者によって／と共に，いかに構築・文脈化する内容についても主たる関心を寄せない。むしろ，携帯電話で撮影された写真を送信した後になされた携帯電話での会話における相互行為の方法そのものに焦点を当てるものである。そういう意味で本研究は，携帯電話に保存された写真についての記録や事後のインタビューではなく，カメラ付き携帯で送信された写真について携帯電話で語るという現象に関する「自然な観察」（H. サックス）である[4]。

2．研究方法とデータ

本研究では，会話データのトランスクリプト（転記）を用いることによりエスノメソドロジー（特に成員カテゴリー化分析と論理文法分析）の視点と会話分析のシークエンスにかかわるアイデアを用いて分析を行った。そのためこの研究では，携帯電話で話をする人が，どのようなカテゴリーを使用するか，カテゴリー間にいかなる論理的な関係（論理文法）があるか，会話はどのような順序（シークエンス）でなしとげられるかということに

注目する（分析方法の詳細は，前田・水川・岡田2007などを参照）。

この研究では，カメラ付き携帯電話を使用して送付されたデジタル写真と会話データを次の設定で，収集した。すなわち，大学の講義において，学生がカメラ付き携帯電話を使って大学構内を歩き，自分の興味を持った物や人の写真を撮り，その携帯電話のメール機能を使って送信し，その後，その送付した写真について携帯電話で話をするというものである（今回の研究では，送付したメールの文字情報は，原則使われず，使われた場合でも会話に出てこない限り扱わない）。録音にはICレコーダーにイヤホン型マイクを使うことで，携帯電話を耳にあてて話をする方法での録音を行った。このため，通話者は耳にイヤホンをつけているだけで，通常の電話の使用の状態で会話をすることができた。今回の調査では，28件の会話が収集され分析された。

３．前提的考察

データを分析する前に，いくつかの前提的な考察を行う。

まず，講義の課題として，学生が写真を撮ることが携帯電話の会話にどのように効いてくるのかを検討したい。例えば，学生は，大学構内で撮影して教室まで戻ってくるため，「戻ってきた」ことが携帯電話の終了の際の話題に出ていることがある。本研究では，このような状況設定やそれに関わる発話は，調査の阻害要因／バイアスとなっているとは考えず，この携帯電話の会話において関連性のある（レリバントな）制約として効いていると考える。これは，どのような携帯電話の会話であっても当該の状況における一定の制約のもとで行われているということ，また，制約があったとしてもその制約は，その状況のリソースとなりうるため，状況と切り離されるものではないこと，以上の二点が考えられるためである。

次に，カメラ付き携帯電話の情報機器の使用上の制約についてはどうだろうか。例えば「画面を見ながら話せない」という制約がある。カメラ付き携帯電話は，話す道具にカメラのディスプレイが付いているため，（ヘッドセットなどを使わない限り）画像を見ながら話を進めることができない。そのため，送信者も受信者も，携帯電話で話すときは送受信した画像を見ないで話をすることになる。

本研究の調査を開始する際には，いくつかの実験的な設定をすることも考えた。例えば，「カメラの画像を見ながら話せないので，写真を撮って送信するのは携帯電話だが，写真の受信はパソコンのメールで行い，受信者はパソコンのモニターに映る写真を見ながら撮影者と携帯電話で会話する」という設定である。これは，ありうる（全く無いとはいえない）設定であるが，携帯電話同士の移動体同士の会話ではないため，今回は実施しなかった。

また，携帯電話同士の会話についても，写真の受信側が携帯電話にヘッドセット・マイクをつけて写真を見ながら会話するという設定も検討してみた。しかし，これも，携帯電話にヘッドセットをつけて受信するという設定が現在の日本ではあまり考えられないこともあり，この設定で実施することは無かった。なにより，これら二つは，携帯電話の特徴（制約）である「ディスプレイを見ながら話ができない」ことを否定的に捉えて，制約を無くすように設定しなおしていることが，「自然な観察」をする上でより問題かもしれない[5]。

映画「バブルへＧＯ」（2007，馬場康雄監督）では，タイムマシンでバブル時代（1990年）に行った主人公が，携帯電話草創期の人に現代のカメラ付き携帯電話を見せるシーンがある。バブル時代の人は，携帯電話にカメラが付いていることに驚いたが，話をしながら画面が見えないことに気づいて「でも，話

しながらどうやって写真とるの？」と質問している。それに対して主人公は「別に話しながら撮らなくても」と嘲笑するのだ。これは，現代において，携帯電話で写真を撮ることと，写真の映るディスプレイを直接見ないで携帯電話で話すことは，別のことであると理解していることを示してはいないだろうか。携帯電話で写真が撮られ，その写真付きメールが送信される。そして，送信者から電話がある。受信者は受信した写真を見ないで話をする。これらは，一連の実践としてあたりまえに行われていることである。このような実践されているが気づかれていない携帯電話に関わる活動を本研究では扱っていきたい。

このように考えると，携帯電話の様々な制約は，イメージ伝達に関わる会話の中で利用されていることがわかる。そのため，カメラ付き携帯電話の制約として，人々は会話の中で写真のイメージを調整すると共に，詳細を詰めていくことにならざるをえない。そして「後で写真を見る」「後で現物を見る」などという会話に結びつくことになる。また，「画像が小さく詳細が見えない」という制約も会話の中のリソースとしてイメージ伝達に利用されている。このような意味で，本研究は，携帯電話が使われる実践の現場を自然な観察により分析するものである。

4．分　　析

本研究では，今回の調査において最も注目に値するデータ１の会話を見ることで研究の一端を示したい。それによってカメラ付き携帯電話における視覚データ伝達についてアイデアを示唆していきたいと考える。

この画像には，確かに「壁」は映っているのだろうが，互いに分かるように写ってはいない。一般的な言い方をすれば「何も映っていない」。より正確に言えば，一面に，濃淡のある灰色のなにものかが写っているだけである。

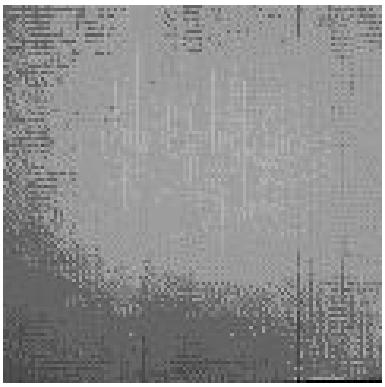
この画像をもとに携帯電話の会話が成立することは，ある種，衝撃的ではなかろうか。これまで，携帯電話の技術革新において，カメラ画像の詳細度をできるだけ上げるように競っていた。精度を上げることによって，より正確に世界を写し出せるものだとでも言っているかのようである。しかし，この写真には「何も写っていない」。それにもかかわらず／であるがゆえに，会話が成立するのはなぜだろうか。この疑問は，会話の成立の仕方を解明することによって明らかになる。

この画像はまた，カメラで撮影された静止画を集めて分類するという研究法にも一定の問題を提起する。すなわち，肝心の画像が何であるか見て取れないと分類しようが無いのである。写真を何であるかと見て取るという実践を前提にしてこそ，その後の分類や分析軸によるマッピングが可能となる。はたして，この「見て取る」という実践は，いかなるものであろうか。それは，写真を「見て取る」という実践を見ていくしかないだろう。

さて，このような視点を持って，データ１をエスノメソドロジーと会話分析の発想をもとにして考察してみたい。この設定では，画像の送付者が電話を掛けることになっている。そのため，Tが電話を掛け，呼び出し音に対してMが「もしもし」と返答している。これは，基本的な電話開始の連鎖となっている(Schegloff 2002)。そして，TとMは，２行目から４行目で，電話の相手に対する確認と同定をして，Tは「見れた？」と本題に入る。

ここでTは，画像の撮影者であり送信者であり，Mは，画像の受信者である。Tは，画像が何であり，どこで何のために撮影されたか知っており，Mは，そうではない。このため，TとMの知識配分は，非対称的である。この非対称な知識配分が，TとMの間に権利と義務を生み出す。例えば，Tが「自分のわかっていることを質問する」権利を持ち，Tから質問がなされるとMが答える義務が生じ

［静止画　1］



［トランスクリプト　1］[6]

1 M: もしもし(0.7)
2 T: もしもし?
3 M: (　　だっけ?)
4 T: うん(.)うんいいよ(.)huh見れた?
5 M: うん見れました
6 T: あれ(.)何かわかった?
7 M: ぜんっぜんわかりません(.)どっかの壁とか=
8 T: =huhなんかね(.)あれ、MSUって書いてあるのわかった?
9 M: え(.)ぜんぜん(0.7)
10 T: え(.)ホントに?なんかね(.)あの(.)バス停のとこにさ(.)門があって=
11 M: =はい
12 T: そこに警備員さんいるじゃん(.)いつも=
13 M: =はいはい(0.6)
14 T: そこの横のところなんか柵なんだけど(0.5)そこにね(.)なんか(.)あの(.)
15　あそこ全部って書いてあって(0.6)なんかちょっと写メだとわかりにくいんだけど=
16 M: =はい
17 T: なんか(.)そう(.)なんか門の横の=
18 M: =はい
19 T: なんかコンクリートとこ全部ね(.)MSUって一個ずつ書いてあるの[今度見てみて(.)
20 M:　[あ、へぇ:
21 T: 帰りとか:[:　[うんそうそう]huh なんかこっち側なんか外から=
22 M:　[は:い　え:[始めて知った:]　=はい
23 T: 学校の中はいる方の(.)コンクリート?=　に書いてあるから=
24 M:　=はい　=うん(.)へぇ:
25 T: ちょっと見てみて(.)
26 T: [うん　] [heh heh　[うん。
27 M: [え：：] [先輩なんでこんなん知ってるんです[か？
28 T: 何hかhね、今年ね、今年気づいたのやっと=
29 M: =hehehehe [heh二年目にしてやっと heh
30 T:　[hehそうなの
31 T: そう、heh そうなの う:ん 見てみてね。
32 M: はぁ：い 分かりました(0.5)
33 T: うん。うん。じゃあ後でね
34 M: はぁい。また後で
35 T: うん↑(0.5)うん。はぁ：い [じゃあね。うん。
36 M:　[はぁい。さよなら：
37 T: はぁ、はぁ：い

ることになる。このことによって，この会話の非対称的な相互行為がなされるのである。

４行目ではTが「見れた?」と質問して，Mが「うん見れました」と応答する相互行為がなされている。これは，質問ー応答の隣接ペアである。ここでは，画像の送信者であるTが，受信者であるMに送信されたということの確認をしている。この行為者カテゴリーの非対称性（送信者／受信者）は，Tが４行目で質問し，Mが５行目で応答するという非対称性と相補的である。送信者という行為者カテゴリーと，そのカテゴリーに結びついた活動である「見れた」という質問がなされている。

５行目で，画像が無事送信され，受信者に見られる状態であることを確認したTは，６行目においてその写真に何が写っているかについてのトピックに移行している。Tが，自分が答えを知っている質問をして（「あれ(.) 何かわかった?」），それをMが７行目で適切に応答している（「ぜんっぜんわかりません (.) どっかの壁とか」）。その後，Tは，いずれ「正解」へと至る前段の「質問」を８行目で行っている。Tが正答のある質問をして，Mがそれに答えて，Tが正答を示唆するという方向でシークエンスが構成されている。

このシークエンスは，H. Mehan（1979）の言う「導入ー応答ー評価（Initiation - Response - Evaluation）」という教示の相互行為を思い起こさせる。例えば，「これは誰ですか」(I) ー「森鴎外です」(R) ー「そのとおり」(E)，というように，教室をはじめとする教示の相互行為では，３つの行為をセットにすることができる。

６行目からの会話において，Tは，写真の撮影者＝送信者という行為者カテゴリーを持ち，Mは，写真の受信者としての行為者カテゴリーを持っている。ふたりは，＜送信者ー受信者＞というカテゴリーがレリバント（関連性があること）になる。そのため，携帯電話で写真を送付する際に，撮影者＝送信者と受信者の間に非対称的な教示関係が生じていると見ることができる。送信者は，なぜ撮影したかを知っており，撮影対象の具体的詳細を知っている。受信者は，撮影の動機を知らないし，撮影対象について（概念的な知識がある場合も考えられるが）その場の具体的詳細は知らない。誤解を恐れず言えば，撮影者＝送信者は，「実物＝現物」を見ており，受信者は，「実物＝現物」ではなく受信した「写真＝コピー」だけを見ているのだ。別言すれば，送信者は，「実物＝現物」を参照するという行為をする権利・語る権利を持っており，受信者は，それを原則的に持っていない（「現物」を参照する権利を持つ場合もあるが，ここでは論じない。同様に，「現物」と「コピー」についての議論も別の機会に譲る）。

この会話で言えば，Tは，何のために自分がそれをやっているのかを知っており，実際の撮影対象について言及し，具体的にどのようなものか語ることができ，その撮影対象を携帯電話で撮影して送信したのである。Mは，その写真を受信して携帯電話の画面で確認している。その際，TもMも，携帯電話の画面を見ない状態で，携帯電話で話をしている。

８行目でTは，「あれ，MSUって書いてあるのわかった?」と撮影対象についての「正解」を示している。それに対して，Mは，「え (.) ぜんぜん」(9) と，写真を見た際には判別できないと述べている。ここでTは，「え (.) ホントに?」と，写真だけでは撮影対象について伝えることができなかったことがわかったことを表明する。

10行目でTは，「なんかね (.) あの (.) バス停のとこにさ…」と，撮影対象がどこにあるのか説明を始める。ここでの発話は，９行目までに確認された情報欠損（写真がよく見えないこと）がリソースとなって，情報を追加するという活動を行っていることに注意すべきである。＜送信者ー受信者＞という行為

者カテゴリーは，撮影の＜周辺状況を説明する－される＞という活動，あるいは＜教示する－される＞という活動と結びつくことになる。

Tは，「そこに警備員さんいるじゃん」(12)「そこの横のところの柵なんだけど」(14)「あそこ全部書いてあって」(15) と説明を続けるが，Mは，14行目から15行目にある沈黙（0.5と0.6）のように，説明の後に適切な返答をするのではなく，短い沈黙をしている。これに対して，Tは，15行目の最後には，「なんかちょっと写メだとわかりにくいんだけど」と釈明している。これは，教示する側が説明しきれていないので，「写メだとわかりにくい」ことを釈明として述べているのである。これは，Tが教示をする責任と義務があることも示していると考えられる。

Tは，さらに17行目19行目で説明を続ける。Mは，22行目で「え：始めて知った：」と，理解が達成されたことを示す。この前後でTの説明は，提案「見てみて」に変遷していく(19, 25)。この提案が終了（25）した後で，Mは，話題をシフトして「先輩なんでこんなん知ってるんですか？」とTに対して質問をする。ここでMとTは，＜先輩－後輩＞のカテゴリー対で行為の意味を編成することになる。つまり，先輩はよく知っていて，後輩はそれを教わるというカテゴリー対である。

Tは，31行目で「見てみて」と３度目の提案をしている。これに対して，Mは「はぁ：い分かりました」と提案を受理している。その後，TとMは，電話の終了の会話に移行して，電話は終了に至っている。

５．結　　論

カメラ付き携帯の写真送付において送信者（撮影者）と受信者には，行為者カテゴリーの非対称性がある。このとき，送信者と受信者は，「撮られるべきもの」（写真の被写体とその意味）についての詳細を＜語ることができる－できない＞対として現れる。つまり，送信者は自らの経験として目の前の現物を写真に撮り送信するのに対して，受信者はその写真を受け取り，携帯電話の小さな画面で見る。これは，実際に知識のストックが送信者に備わっているというよりも，送信者（撮影者）という行為者カテゴリーに付随した権利と義務を伴った形で現れる。これにより，写真がトピックになる限り，＜送信者－受信者＞は，カテゴリーに結びついた活動である＜周辺状況を説明する－される＞＜話題提供をする－される＞という行為カテゴリーの対を持った者として現れることになる。

特に，本研究では写真がうまく映っていない場合を詳細に見ていくことで，写真送付が「うまくいかなかった」事態における会話を分析して，写真の情報欠損が送信者・受信者にとっては（非対称性を前提とすれば）前提となる事実であり，情報欠損を会話の中でリソースとして利用することで，次に来る活動と結び付けていることがわかった。

この研究では，具体的な携帯電話の会話データにそって，写真の＜送信者－受信者＞という行為者カテゴリーがもつ非対称性についての分析の一端を示した。それにより，視覚イメージ伝達を伴う携帯電話の会話において，行為者カテゴリーの非対称性が，「教示」を含めた相互行為のデザインに深く関わっていることが明らかになった。

カメラ付き携帯電話の使用において，写真を送ることが会話を伴うコミュニケーションにとって有用なものとなるのか，それともそれほど有用ではなく，カメラ機能というものは写真を保存することが主たる機能となってしまうのか，ここでの考察だけでは判断することはできない。しかし，本研究では，カメラ付き携帯の，特に話しながら送信した写真を見ることができない等という制約が，送信者／受信者というカテゴリーと結びつくこと

によって映像詳細に関連性を持ちながら会話が進行していくことを会話のシークエンス分析から明らかにした。これらにより，送信した写真を見ながら電話の会話ができないという携帯電話の制約が，送った写真についての会話をデザインすることが本論文では，示唆されたのである。

注

＊本研究は，科学研究費基盤研究（B）（17330120）「視覚イメージ伝達のカテゴリー分析：モバイル技術を利用した相互行為のおける教示実践」（研究代表者：是永 論・立教大学，研究分担者：水川喜文・北星学園大学，五十嵐素子・光陵女子短期大学，研究協力者：酒井信一郎・立教大学大学院）の成果の一部である。写真付きメールと会話の収集に関しては，この共同研究の研究分担者である五十嵐素子（光陵女子短期大学准教授）が行った。記して感謝したい。

⑴　『ケータイ白書 2006』では，「カメラ撮影頻度は，週１～月１回が過半数。撮影頻度は減少傾向」，「75％がカメラ付き携帯電話での撮影画像を『プリントしない』」「静止画メールの送信頻度は減少。月数通未満が最多に」というように，静止画メールの送信については否定的な見解がなされていた。2007年版では，「送信頻度」に減少が見られなかったことから，それほど否定的な見解を示していない。パケット定額などの普及により静止画の送信の利用が安定してきたからかもしれない。また，動画メールの送信頻度はさらに低い水準のままである。一方，『モバイル社会白書 2007』では，写真付きメールは，基本機能として普及しているとだけしており，使用頻度が減少していることや，写真保存に対して送信が少ないことは，指摘していない。むしろ，跡見女子大学の写真コンテストなどを紹介して利用の活性化を示唆している。

⑵　本論文では，写真付きメールをどのようにしたら使用頻度を上げることができるか，という課題はさしあたり持っていない。また，本研究の成果は，同時に行った「住宅設備会社のフィールドワーク」においてカメラ付き携帯電話が配管作業に活用しづらかったことに関連していると考えれるが，その検討は別の機会に譲りたい。

⑶　この他，『モバイル社会白書 2006』では，「子ども」という章の中の「携帯電話による子どもへの影響」において，「写真付きメール送信頻度が友人関係に及ぼす影響」を調査・分析している。ここでは，写真付きメールの送信頻度が多いほど，高校生において「嫌われ回避」と「甘えない関係」が低下するとしている。つまり，写真を送信するほど「嫌われ」は回避されず，甘えた関係を容認するということである。また，「高校生では，写真付きメールの送信頻度が多いほど，写真付きメールへの親和度が高くなる」

⑷　Koskinen（2004）は，エスノメソドロジー・会話分析の視点からＭＭＳ（Multimedia Messaging Service）を考察している。ここでは，欧米で普及している文字送信システムのＳＭＳ（Short Messaging Service）を拡張して，メールに写真や動画を添付できるＭＭＳの送信記録をもとに分析している。このような写真や動画の受信に対して，メールなど文字情報で返信することは一般になされている。これに対し，本研究では，メールでの返信ではなく，写真に関する携帯電話での会話に焦点を当てた。

⑸　もちろん，新しい携帯電話システムを構築するためには，例えば「写真を見ながら話せない」ことを解消するために，さまざまな試みがなされるべきかもしれない。ヘッドセットやアイウェア・ディスプレイ，マルチアングルなどアイデアとしてはいくつも考えられるが，本稿では新たなシステムを開発することはひとまずしない。同様に，いかに写真の精度を上げるかというような技術的な議論もここではしない。

本研究の視点からは，上記のそれぞれのシステムに独自の制約があることにこそ注目すべきである。そういう意味では，このような制約と参与者の実践という問題は，常につきまとって

おり，現行の携帯電話での会話を含めたさまざまな具体的な実践を考察することには意義があると考える。

また，これらの制約と，カメラ付き携帯電話の普及率に対して利用頻度や利用方法（プリントしない）などが関係しているであろうが，今回の課題とはしない。

⑹　トランスクリプトは，基本的にジェファーソン・システムに従う（西阪 2001：xi-xvなど参照）。おもな記号は次のとおり，カッコ内は沈黙の秒数（.）は0.2秒以下。：は音の延長。[は同時発話。《 》 は説明。（ ）は，不明瞭な発話。

文　献

博報堂生活総合研究所編，2001，『ケータイ生活白書』NTT出版.

五十嵐素子，2006「携帯電話を用いた道案内の分析」山崎編.

是永論・五十嵐素子，2006 「携帯メール――「親しさ」にかかわるメディア」山崎編.

Korenaga, R.; Y. Mizukawa, 1998, 「達成されるものとしてのメディア性：CSCWにおける志向性の配置をめぐって」『第２回認知科学国際会議/日本認知科学会第16回大会合同会議要旨集』910-913.

Koskinen, I., 2004, “Seeing with Mobile Images：Toward Perpetual Visual Contact”, The Global and the Local in Mobile Communication The Mobile Information Society, Conference in Budapest, June 10-12, 2004. Friday, June 11（web version：http：//www.fil.hu/mobil/2004/Koskinen_webversion.pdf）

前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編著，2007，『ワードマップ・エスノメソドロジー』新曜社.

松田美佐・岡部大介・伊藤瑞子編，2006，『ケータイのある風景』北大路書房.

Mehan, H. 1979 *Learning Lessons*, Harvard University Press.

水川喜文，1997「ビデオゲームのある風景　――インタラクションの中のデザイン」山崎敬一・西阪仰編『語る身体・見る身体』 pp123-143，ハーベスト社.

モバイル・コンテンツ・フォーラム編，2005，『ケータイ白書2006』インプレス.

モバイル・コンテンツ・フォーラム編，2006，『ケータイ白書2007』インプレス.

モバイル社会研究所企画・監修，2006，『モバイル社会白書 2006』NTT出版.

モバイル社会研究所企画・監修，2007，『モバイル社会白書 2007』NTT出版.

西阪仰，2001，『心と行為』岩波書店.

日本記号学会編，2005，『ケータイ研究の最前線』慶應義塾大学出版会.

岡部大介・伊藤瑞子，2006，「カメラ付きケータイ利用のエスノグラフィー」 松田ほか編，2006，238-246.

岡田朋之・松田美佐編，2002，『ケータイ学入門』有斐閣.

Schegloff, E. A. 2002 “Beginning in telephone”, J. E. Katz and Aakhus, M. eds., *Perpetual Contact ： MobileCommunication, Private Talk*, Public Performance. Cambridge; Cambridge University Press. pp284-300.（平英美（訳）2003　電話の開始部　立川敬二（監修）富田英典（監訳）『絶え間なき交信の時代　――ケータイ文化の誕生』NTT出版，370-389）.

山崎敬一編，2006『モバイル･コミュニケーション』大修館書店.

［Abstract］

Categories in the Interaction through Mobile Phones with Visual Image Messaging

Yoshifumi MIZUKAWA

This paper discusses how people interact through mobile phones with visual image messaging, using studies in ethnomethodology and conversation analysis. The interaction data was assembled in the following way. Students (mobile phone users) took pictures with mobile phone, sent them to other students, called their mobile phones and talk about the pictures on the mobile phones. Natural observation (H. Sacks) was used to this study. We found asymmetrical knowledge between senders and receivers and categorical pairs (sender - receiver) represent rights and duties in the interaction. Also, we found three-part interaction in the mobile phone interaction, Initiation - Response - Evaluation by H. Mehan, which is relevant in educational instruction. This paper concludes that instructional / asymmetrical categories are relevant in mobile phone interaction with visual image messaging.

Key Words：visual image, mobile phone, interaction, conversation analysis, category